

# 魚類防疫に関する技術指導と研究

(水産物衛生・安全対策事業)

岡本 満・古谷尚大・開内 洋・清川智之・松本洋典・寺戸稔貴・雑賀達生・石原成嗣

## 1. 目的

海面及び内水面の魚病被害軽減と魚病のまん延防止のため、魚病検査や水産用医薬品の適正使用の指導及び養魚指導・相談を行なう。

## 2. 方法

種苗生産、中間育成、養殖場等の生産施設を巡回し、疾病の対処法や飼育方法の指導・助言を行うとともに、各生産施設や天然水域における疾病発生時には現地調査、魚病検査により診断を行った。検査方法は、主に外観および解剖による肉眼観察、検鏡観察、細菌分離、PCR 検査等とした。細菌が分離された場合は、対処法および水産用医薬品の適正使用について指導を行った。

モニタリング調査として、ヒラメのクドア属粘液胞子虫 (*Kudoa septempunctata*) について、農林水産省ガイドラインおよび水産庁が作成した防止対策等に従って、PCR による定期的な保菌検査を実施した。また、ヒラメのシュードモナス症については、近年発生がみられなくなったため、島根県のヒラメ種苗放流に係る魚病検査体制が変更され、2024 (令和 6) 年度からは種苗生産中に症状が確認された場合等に実施することとなった。なお、コイヘルペスウイルス (KHV) 病の養殖業者の定期検査については、2019 (令和元) 年 7 月以降は未発生水域のみを対象として行うこととしたため、今年度の検査はなかった。アユの冷水病およびエドワジエラ・イクタルリ症対策については、県外産種苗放流情報の収集と県内産人工種苗の保菌検査を実施した。

## 3. 結果

### (1) 疾病発生状況

今年度の魚病診断件数は、海面 2 件、内水面 2 件の計 4 件であった。概要は次のとおりである。

海面では、クルマエビ陸上養殖において、5 月に日間死亡率 1%程度の不調がみられ、クルマエビのホワイトスポット症とイリドウイルス症について PCR 検査を行ったがすべて陰性だった。不調はまもなく終息した。10 月に栽培漁業センターの海面生け簀で飼育していた親魚用マダイに潰瘍ができ調子が悪いため魚病検査を行った。菌分離を行ったが原因

菌は特定できなかった。夏季の水温が非常に高かった (最高 29.4℃) ことから、ストレスによる影響も考えられた。

内水面では、6 月 14 日に邑智郡邑南町の養殖池において斃死したコイについて KHV の PCR 検査を実施したところ、陽性の結果を得た (その後 (国研) 水産研究・教育機構 水産技術研究所による確定診断でも陽性) ため、当該池のコイの全数処分と池の消毒が実施された。8 月に浜田市の河川で、アユを始めとする複数魚種のへい死が起こった。アユ死魚の検査を行ったところ、体表や内臓に異常は認められず、水温帯からエドワジエラ・イクタルリを疑い、分離を試みたが陰性であった。

### (2) モニタリング調査

ヒラメの県内種苗生産施設を対象に種苗搬出前 (放流前) において実施した保菌検査で、*K. Septempunctata* (計 50 検体) は全て陰性であることを確認した。

アユの冷水病およびエドワジエラ・イクタルリ症の保菌検査 (26 件 762 尾) では、全て陰性であることを確認した。

なお、疾病発生・診断状況の詳細については、添付資料「2024 年度魚病診断結果 (海面)」および「2024 年度魚病診断結果 (内水面)」に記載した。